

## いのちを育み、自然と共生する農業

茨城大学農学部教授 中島 紀一

### はじめに

ご紹介いただきました茨城大学の中島です。今日は佐久市有機農業研究協議会設立 30 周年の記念すべき集まりにお招きいただきありがとうございます。また、今日の集いは、若月俊一先生の生誕 100 年の記念事業にもなっているという話を伺って、大変緊張しております。

実は、私は佐久総合病院の事務長をされていた萩原篤さんの大学の後輩で、萩原さんと私の恩師は菱沼達也先生で、菱沼先生は若月先生の戦中期からの盟友でした。菱沼先生は若月先生の二つ年下で、千葉大学医学部に進まれて、戦前、反戦運動や農民運動に関わって大学を退学となり、医者道を諦めて獣医、農業の道に進まれました。若月先生も同じ時代に比較的同じお考えで、いろいろな活動をされたということで、菱沼先生からは若月先生のごことは何度も聞かせていただきました。若月先生のお元気な頃に、私も何回か直接お話しさせていただいたこともあります。そんなご縁もあって若月先生生誕 100 年ということには、私自身も胸に強く感じる場所があります。その集まりでお話しさせていただくことを大変光栄に思っております。

今日は、有機農業は、特別な農業ではなく、農業に本来のあり方を取り戻そうとする取り組みの総称であり、その目指すところは、表題に示しました「いのちを育み自然と共生する農業」の確立にあるのだ、ということをつくつかの側面からお話しさせていただきたいと思います。

### 有機農業の歩みを振り返って 志高い在野の運動から有機農業推進法制定へ

日本の有機農業の歩みを調べてみると、その最初は、今から約 70 年ほど前に、「わら一本の革命」で有名になった福岡正信さんとか、世界救世教を興された岡田茂吉さんとか、そういう何人かの先駆者の方々が最初の提唱をされてから、小さな取り組み開始されたようです。以来 70 年余の歩みがあります。日本の民間の農業運動としては一番息の長い農業運動の一つだと言えるように思います。

その長い歩みを貫いてきた精神の軸は、農と食、それぞれのあり方とその関係性についての強い信念にあったと思われまふ。生産者の皆さんは、有機農業に強い意志を持って取組まれ、消費者の皆さんは有機農産物をいのちが込められた食べ物として強い喜びを持って食べてこられました。有機農業は生産者と消費者が、個と個として直接向き合い、信頼し合って連携し、理想に向かって志高く取り組んできた運動でした。

しかし、志の高い信念の運動というものは、別の面から見ると、そこに狭さが生まれがちでもあります。有機農業は正しい農業のあり方なのですが、なかなか広く普及しないと

いう問題点を抱えてきたというのも偽らざる事実だったと思います。

そうした有機農業の歩みの中で、2006年の12月に有機農業推進法が制定されたことの意味はたいへん大きかったと言えます。この法律は、有機農業の長い取り組みの成果をしっかりと踏まえつつ、それが社会の中に広く定着がしていくことを目指して制定されたものでした。この法律ができて以来、今までの取り組みの枠を超えて、生産者と消費者の、個と個のつながりだけでなく、有機農業を地域に広げていこうとする新しい動きが各地に出来はじめています。

### 佐久市有機農業研究協議会の先進性

そうしたなかで佐久市有機農業研究協議会では、有機農業者だけではなく、あるいは有機農業の農産物の消費者だけではなくて、佐久総合病院が推進のコーディネーターを務められて、行政をはじめ地域の沢山の方々の参加を促しつつ取り組みが進められて来ました。そこでは「地域として有機農業を考える」という取り組みが重ねられてきました。個と個との連携を主な特質として歩んできた日本の有機農業の取り組みの中で、地域における有機農業の広がり常に心を向けてこられた佐久市有機農業研究協議会の取り組みは、たいへん先進的なものだったと考えられます。

有機農業推進法が出来てからは、臼田、佐久のこうした取り組みに学び、「地域に広がる有機農業」をめざす取り組みが全国各地に広がりつつあります。私がカウントしただけでも全国で100箇所くらいの地域で、臼田、佐久に類似した動きが出て参りました。1月、2月になると、こういう組織の総会や研修会が毎週、毎週、全国のどこかで開かれるというよう状況が作られてきています。佐久市有機農業研究協議会が目指した有機農業推進の形が、いまやっと全国に広がってきているというふうに思います。

### 有機農業推進法の内容

2006年12月に制定された有機農業推進法の内容的核心は何処にあるかといえば、それは次のような主旨の第4条の規定にあります。

「国と自治体（法律の用語では地方公共団体ということになっていますが）は有機農業の推進の責務を有する」

「有機農業推進は農業者や消費者との協働で進めていく」

農業にはいろいろなやり方がありますがけれども、法律で国や自治体が推進の責務を負うという農業のあり方は有機農業だけのことでしょう。

信念の強いある種の変わり者たちの取り組みだったとも言える有機農業が、法律制定で、突然に、社会的に大きく位置づけられる農業形態になったということです。

これは有機農業をやっている方からすると、大変うれしいことでした。自分たちがやってきたことは正しかった、それをやると国はそれを認めた。この喜びの感情は大きかったと思います。この法律の制定で有機農業者も有機農産物の消費者も大いに励まされました。

しかし、このことをもう少し幅広い視野から見ようとすれば、何で有機農業の人たちだけが評価され、なぜ有機農業ばかりが、法律で、国や自治体が推進の責務を負うという位置づけになるのか、という疑問も当然提起されてくるように思います。

有機農業の側は、そうした疑問に対して、「それはね、有機農業にはこういう社会的役割

や社会的な意味があるから、国や自治体が有機農業を推進することは当然なんです」という答えを示さなければならないわけです。

しかし、現実には、有機農業にどういう価値があるのかと問われても、100人の有機農業者がおられれば100様の答えが出てくるんですが、なかなか社会的にこうだということまで話が固まりきれていないという面があるのが実態ではないかと思えます。

### **有機農業の社会的意義**

そんな状態のままでは拙いので、遅ればせながら、有機農業というのはどういう社会的な役割があるのかということ整理してみました。今日はそんなことについてお話ししたいと思っております。

今、有機農業はやっている人はそれぞれ自分の農業としてやっているわけですから、当然自分としてなぜこの農業をやるのか、自分自身の理由があります。それから有機農産物を食べている方は、自分が食べるわけですから、自分がなぜ食べるのか、という私としての意味はそれなりにはっきりしているとは思いますが。

ただ私は私の意志で農業をやり、あなたはあなたの意志で農産物を食べるというだけではなくて、国や自治体が責務として公共の財政をつかって有機農業を推進していく根拠ということになると、有機農業に取り組む私的な理由付けだけでは不十分だろうと思うわけです。ここで私的理付けを超えて、有機農業推進の社会的意義、有機農業に期待されている社会的役割を明確にしていくことも重要な課題だと思うのです。

### **食と健康の視点から**

そのひとつには食と健康という視点があるだろうと思えます。これはこちらの有機農業推進協議会、あるいは佐久病院の若月先生、松島先生ほかの皆さんがずっと強調してやまなかったことです。農業というのは食と健康を必ず、まず第一に考えなければいけないのに、現実の農業は、お金や効率が優先されてなかなかそうになっていない。食べ物として自分が生産した農産物にどんな価値があるのか、国民の健康にとってこの食べ物を提供することがどんな意味があるのかということにこだわりながら、農業が展開されているか、というとなかなかそうはなっていない。物であるとかお金であることが先に立ってしまう。そんな現実のなかで有機農業は、たとえお金の面では不利であっても、物はそれほど穫れなくても、でもやっぱり農というのは、食と健康に役立つことが一番なんだよと考え続けて実践されつづけてきました。

最近、食育の大切さが語られるようになってきました。食育基本法というのが2005年に制定されました。有機農業推進基本法制定の前年になります。そこでは人が育っていくためには、食に関する教育がすごく大事だと言われ、その中で望ましい食のあり方がいろいろ社会的にも語られてくる。で、そのなかで食は結局のところ、農の問題ではないのかという認識も広がってきました。

### **学校給食法の充実した目的**

食育基本法の制定を受けて、2008年には学校給食法が大幅に改正されました。学校給食の目的が、その法律の中でかなり充実した規定となりました。例えば、第4項目には「食

生活が自然の恩恵の上に成り立つものであることについての理解を深め、生命および自然を尊重する精神ならびに環境の保全に寄与する態度を養うこと」と書かれています。

5 番目には「食生活が食に関わる人々の活動に支えられていることについての理解を深め、勤労を重んずる態度を養うこと」こういうことが学校給食法の目的として書かれています。

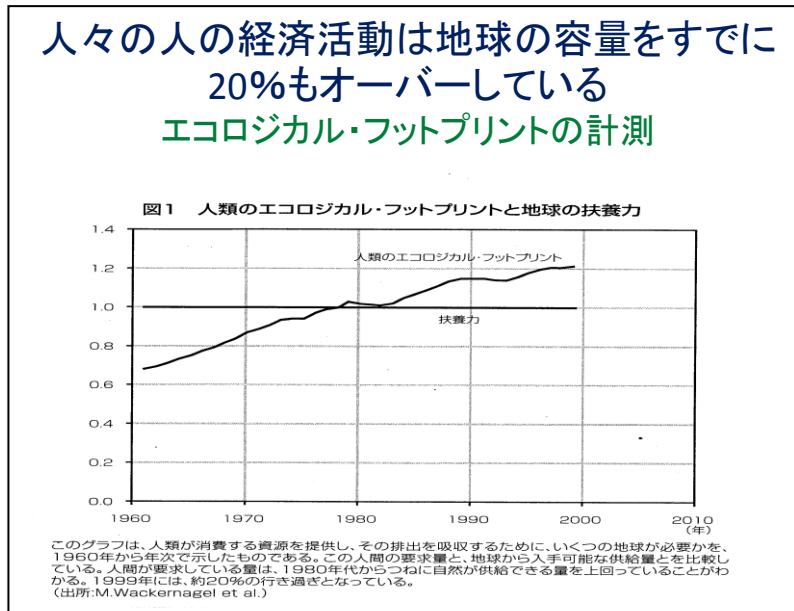
では、こうした食の側から提起された目的に、十分に対応できる農業とは一体どんな農業なんだろうかと考えてみると、まず筆頭には有機農業があげられる。有機農業はこういうことを 70 年前から主張しながら実践してきた。この当たりのところに有機農業の社会的意義、大切な使命が一つあるだろうと思います。

### 自然と環境の視点から

2 番目はやはり環境問題でしょう。

今年の夏はとても暑かった。この暑さが地球温暖化と直接つながるのかは分かりませんが、とにかくこの印象から地球温暖化は大変なことだとの認識は定着したと思います。また、ついこの間は名古屋で COP10 という国際会議が開かれて、生き物の絶滅が地球的規模で進んでいることが強調されました。

しかも、気候が変動していったり、炭酸ガス濃度が増えたり、生き物が絶滅したりという地球環境の危機は、自然現象として起きているのではなくて、人間の経済活動が急激に拡大する結果として起きてきていることが



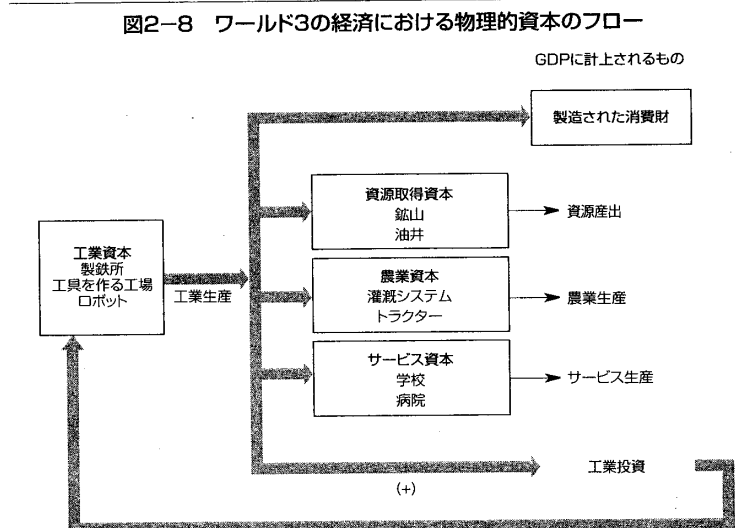
明確にされてきました。環境問題の視点から、人間の経済活動のあり方がいま問われているわけです。このままではだめだ。このままでは地球、宇宙船地球号は破滅してしまうだろうと、ほぼ全ての科学者が言うようになっている。

厳密に検討すれば、あまりいい指標ではないと思うのですが、エコロジカル・フットプリントという考え方があります。ここに地球のキャパシティー、地球の環境容量という視点から線を引いてみると、人間の経済活動は、ちょうど 1980 年頃に、今から 30 年くらいに地球のキャパシティーは満杯の状態になってしまった。そこから 10 年で 10% くらいオーバーして、現在の 2010 年というところまでキャパオーバー 30% くらいのところに来ている。この状態にどのように対応していったらいいのか、ということが今世界的に問われているわけですね。

## 農業は工業の川下産業になっている

1971年に人びとの経済活動と地球の資源や環境容量との関係について最初に警鐘をならした著作にメドウズという方の『成長の限界』があります。この図はそのメドウズのそ

### メドウズ『限界を超えて』1992年 農業は工業の川下産業になっている①



工業生産とその分配は、ワールド3のシミュレーション経済の行動パターンの中心的要素である。工業資本の規模によって、毎年の工業生産量が決まり、その工業生産は、その国の目標やニーズに従って、5つの部門に分配される。消費される工業生産、資源部門へ分配され資源の獲得のために使われる工業生産、土地開発や土地収率向上のために農業部門に振り向けられる工業生産、社会サービスに投資される工業生産がある。そして、残った工業生産が減耗を補い、工業資本ストックをさらに拡充するために、工業部門に投資される。

の後の著作の中に入っている図です。地球温暖化にしても、食糧問題にしても、あるいは生物多様性の危機にしても、端的に言えば、工業生産の異常な拡大、都市の異常な膨張のなかで地球のキャパシティを越えてしまったということなんです。それでは、そういう人間の経済活動の中心はどこにあるのか、それは工業であるとすれば、工業と農業の関係はどういう関係なのか、ということをもメドウズが分析しています。

私たちが普通考えると、農業は第一次生産だから生産の最初であって、その次に工業があって、消費があるだろうということになるでしょう。すなわち生産の一番川上には農業があって、真ん中に工業があって、川下に消費があるという理解です。

しかし、メドウズの冷静な分析からは違った図が描かれてきます。これがその分析結果なのですが、農業は明らかに工業の川下産業とされています。工業の生産物を使って食べ物を生産しているのが農業だという理解です。

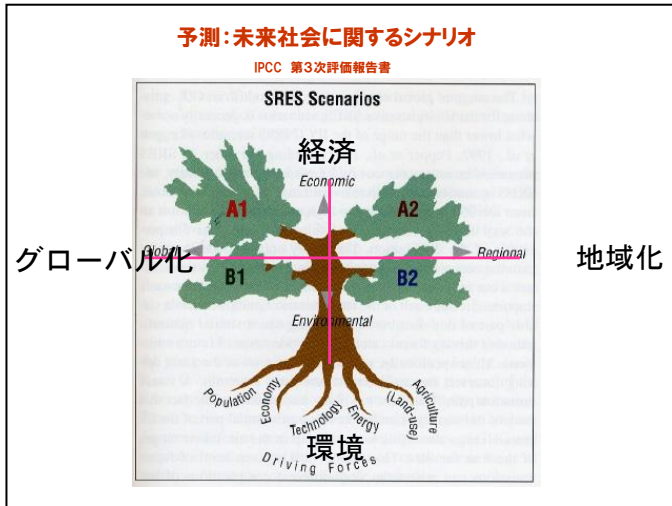
ここに現代的な農業、農業近代化ということの本質が示されています。農業近代化とは農業の生産方法のなかに工業生産力を持ち込んできて、生産をあげていくというあり方だったということです。農業に持ち込まれた工業製品は、機械もあるし、ビニールもあるし、肥料もあるし、農薬もある。

今の、近代農業は、農業を始めるに当たって、そういう資材をそろえるところからしか始まりません。農業は明らかに工業資材の消費マーケットになっている。そういうなかで、地球温暖化という話になると、農業をやればやるほど、地球温暖化に荷担してしまうとい

う構造がいま、社会的につくられてきている。私たちは地球環境保全という視点から、この現実を厳しく見つめ直す必要があると思います。

### 予測：未来社会に関するシナリオ

これは IPCC という地球温暖化についての国連の組織が 2003 年に出した報告書に載っている図です。地球温暖化対策をみんなが進めていくということを前提にしながら、国々で



の取り組みはどのような座標軸のもとで整理されるのが示されています。ここでは縦に経済成長と環境保全という対抗的な軸線を引き、またそれと交差させて横線としてグローバル化と地域尊重というもう一つの対抗的な軸線を引いてみた。

こう整理してみると、いろいろな国々での活動は、結局のところ、経済成長とグローバル化の推進を前提とするという枠組みのなかあ

ることが鮮明にされています。今の TPP（環太平洋経済連携協定）の推進などはそういう枠組みの再編強化に他なりません。

そうしたところを進めつつ、併せて環境対策を進めますというのが A1 というあり方です。これが世界の一番普通のあり方だということでしょう。

しかし、こうしたあり方の対極には、地域を大切に、環境を大切に国を運営していこうという B2 のようなあり方もあります。

典型的には、A1 と B2 の対抗的な関係の中で、A1 の方向に進むのか、B2 の方向に進むのか、それはそれぞれの国で、いろいろなことを考慮して判断したらいいのではないのでしょうか、というのが 2003 年の IPCC の報告書の見地なんです。

しかし、考えてみると、ほとんど全ての国は A1 のなかにいるわけですね。日本もまさしく A1 のなかで動いています。ところが、地球のいろいろな環境問題は、経済成長とグローバル化のなかから出てきているわけですよ。その大きな基本的枠組みはそのまま継続して、経済成長も追求し、グローバル化もさらに進めて、環境問題のもともとの原因を大きく広げつつ、環境問題の対策をするといっても、それは環境問題の対策をしないよりはした方がいいですけども、その先に地球の未来があるのかと子どもたちに問われれば、それはそうはいかないと答えざるを得ないでしょう。

A1 という方向には、現実性はあるけれども理想はないという話だと思います。

それに対して、B2 ですね。B2 のように、生きている国はおそらく現実にはブータンぐらいではないでしょうか。ブータンはとっても幸せな国として最近評価されています。

ブータンに続く国は他にあるかどうか。B2 の良さをそれなりに皆さんが感じておられるんだと思いますが、現実には誰も B2 の方向に進んでいかない。そこには、背に腹は代えられないという判断があるのだと思います。B2 の世界には貧しくて束縛が多いんではない

か、という懸念もあるのでしよう。

そういう意味も含めて、現実的リアリティーが B2 のシナリオのなかに見られないということだと思っんですね。B2 のシナリオには理想はあるが、現実的リアリティーが見つけられないということでしょう。

そこで、私たちは今何を考えているかという事です。私たちは今 A1 の世界に浸かっているわけですね。だけど、どう考えても、A1 である限り、地球の未来はないと思っんですね。地球の未来を救おうとすれば、B2 の世界に進むしかない、とすれば B2 へと進む具体的な可能性をつくれるかどうか、という点に私たちの模索の焦点がある。

でもこれはなかなか難しい課題だと思っんですね。環境を重視して、地域を大事にする理念はいいんだけど、現実のところなかなか大変でしょう。雇用の問題もあるし、所得の問題もあるし、福祉の問題もありますよ。全部お金じゃないですか、という話になって、そのお金のことを棚上げにして B2 が追求できますか。というとなかなか現実には難しい。

でも考えてみると、B2 の方向のなかで現実的な豊かさをつくる事が出来るかも知れない可能性が開かれている領域があるんですね。実はそれが農業です。農業は先ほど工業の川下産業に位置づけられて、構造化されてしまったと云いましたが、昔からそうだったということではなくて、昔は農は国の基だったんですよ。農が川上にあつて、その基に人びとの生活や幸せがつけられてきたという長い人類の歴史があつて、それがちょっとずれちゃったところに地球環境問題がでてきたということです。

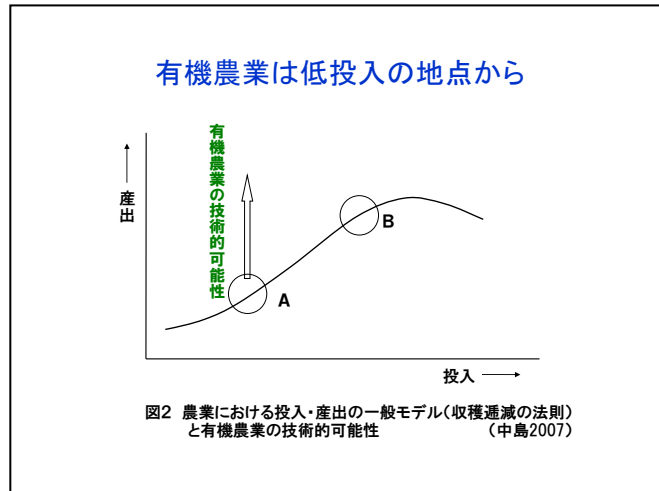
農業の本来を取り戻そうとする有機農業は、B2 の世界の現実性を、具体的な田んぼや畑や食べ物の現実のなかでつくっていかう、ということだったんじゃないかと思っんですね。それが簡単にうまくいくとは言えない。でも有機農業の各地の実践のなかで、B2 の世界が現実になつてくる事が出来るんだ、ということが見えてきているというのが有機農業の 60 年、70 年の歩みの現在です。

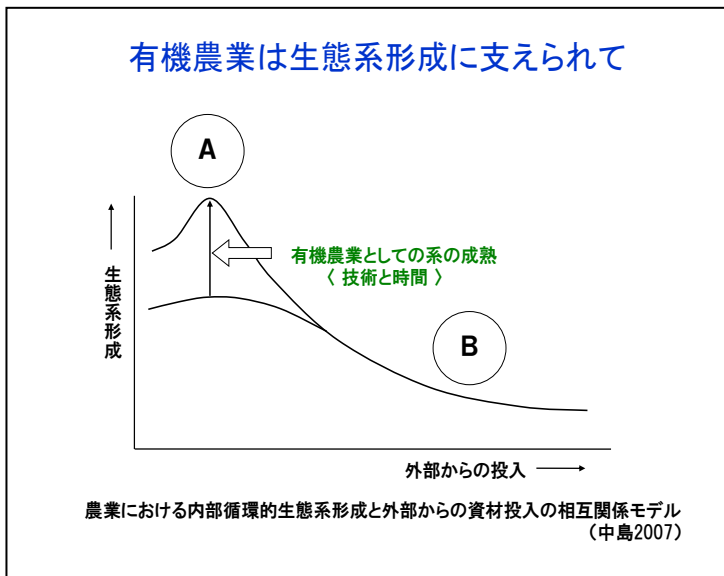
とすればですね、そういう有機農業を国が法律で支援するのは当然のことではないか、というふうに言えるのではないかと思っんですね。

### 有機農業は資材を使わずに生産性を上げる

ここには農家の方がたくさん居られると思っんですが、今年の米作りに肥やしをなんぼ使ったかという話あります。やっぱり、肥料を入れれば収量があがっていくという関係はあります。肥やしを入れなければ収量は落ちる。肥やしを上手に使っていくと、収量は上がる。

しかし、この肥料をたくさん使っていくという話は、結局、環境を壊していくというこ





とつながっていくわけですね。環境を守ろうとすると、肥やしなんか使わない方がいい。使わない方がいいけれども、収量は下がってしまう。農業で頑張ろうとすると、環境負荷になる。あまり頑張らずに、じっとしていると、環境問題にはいいのだけれど、現実には農家はそれでは生きていけない。ということで、大変難しいジレンマだろーと思えますね。

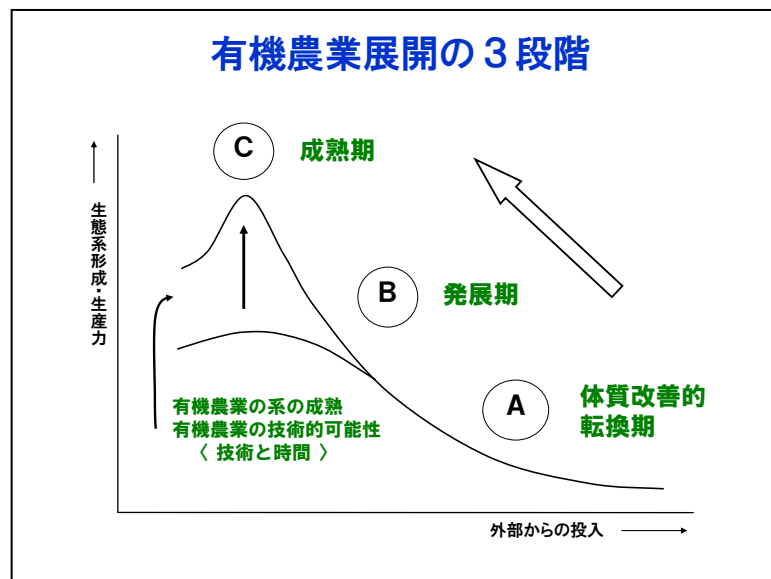
ところが、有機農業では、

実は、あまり肥やしを使わなくても、あまり資材を使わなくても、農業は発展できますよという道が拓かれてきた。このことを図に示してみました。図のAからBに動いていくという線上ではなくて、Aというあまり資材を使わないというところに踏みとどまって、しかし生産が上がっていくことを追求したのが有機農業だった。

### 有機農業展開の3段階

そんなうまい話はあるのか。農業ではあるんですね。それはどういうことかということ、土が良くなり、栽培の環境が好くなって、作物に健康に育つ力が付けば、肥料などの資材を使わなくても、生産は向上していく。土が良くなることも、作物が健康に育つことも、それ自体は自然の側のことであって、お金とは関係ないですね。資材を投入することとは関係ないですよ。土は、土として良くなるんであって、作物は作物として根を伸ばすんだと。その関係をうまくつくっていくのが有機農業なんだと。そこに工業製品を投入して誘導するのではなく、作物自身、土自身の力で生産が高まって行くような仕組みをつくる。

それを別の言い方をすれば、畑や田んぼの生態系が豊かになっていくこと。有機農業では土づくりがある程度進んだという言い方。有機農業は始めた数年はなかなか大変ですけども、だんだんだんだん良くなっていったって、最初は肥料のやり方もさうとう工夫するん



だけれども、あるところまで来ると、肥やしはあまり入れなくても穫れるんだよね。別に病虫害の心配をしなくても、病気もあまり出ないし、虫もあまりでない。とくに美味しくつくろうとしているわけではないんだけど、なんか美味しい。という世界が有機農業を5年10年続けていくとほぼ共通につくられていく。

生態系形成と資材の投入の関係を見てみると、図のように逆相関の関係があって、化学肥料や農薬などの資材をたくさん入れたところにミミズは育たない。ミミズを育てようと思えば、肥料を入れずに、代わりに田んぼの表面にワラを撒いたりする。そこに僅かな米ぬかなんかを入れてあげれば、虫が広がり、土の虫が広がり、ミミズが広がり、土は豊かになっていく。こうして豊かになっていく農の生態系を、有機農業は、それなりの技術と時間をもってより高度なものに変えていく。ここに有機農業技術の共通したありかた、方向がある。

で、このことを有機農業の発展の段階プログラムとして書いてみると、始まりの頃は畑に、田んぼに生態系が出来ていないし、作物も畑に自分で生きる力を発揮するようになっていない。最初は土のなかでの体質改善が必要な時期があって、体質改善がある程度まで実現すると、だんだん良くなっていくプロセスがあって、そしてあるところまで行けば、それほどいわずに出来ていく世界になっていく。

ここで、もう一度 IPCC の図式を見てみましょう。

そうなるくと、有機農業は、明らかに B2 の世界ですね。日本の現実のなかでも私たちの取り組みのなかに、日本という自然を上手に使って行けば、そこに新しい世界が出てくる。この有機農業と健康がもし結びついていけば、農業がよくなって、みんなが健康になる。そして地域づくりが進んでいけば、地域が良くなります。

こうしたなかで B2 のシナリオの日本的リアリティーが少しずつつくられていくんではないか。そこに、有機農業の大きな社会的意義があるんではないかと思います。

### 自給的暮らしづくりの視点から

それから、もう一つ、有機農業は自給的暮らしづくりということがあると思います。現在の私たちは、買い食いをしている。何事もお金を握って、お店に行くところから暮らしが始まるというのが現実だと思いますけれども、少し前は、食べ物がなければ畑に行くし、何かほしいものがあれば山に行き木を拾ってきたりして、みんな自分の手作りのなかで暮らしをつくってきたと思うんです。これからの時代は、もう一度、この自給的暮らしを考えなければいけない。こうした道を意識的に求めていくというところにも有機農業の社会的意義があると思います。

### 次の世代を育てる視点から

それから地域みんなが自然を大事にして生きていき、そして何よりも次の世代を育てるという視点が大切ではないか。次の子どもたちに食を教えるというときに、電子レンジの使いかたを教えるのか、あるいは、かまどの火の炊き方を教えるのか。そこが大きな分岐点ではないかと思いますね。次の世代を育てる場合、人間が自然とどのように一緒に生きていけるのかというそのセンスを、暮らしかたの点でも、生き方の点でも、身体のありかたの点でも、皆さんに考えてもらおう。そのようなところに、有機農業の社会的意味という

ようなことが考えられていくのではないかと思います。

### 若月先生の有機農業論

最後に、若月先生のお話を少しさせていただきます。1971年に日本有機農業研究会という有機農業の全国組織が設立されました。この日本有機農業研究会はJA組織のリーダーの一人であった一楽照雄さんという方が最初に提唱されて、その一楽さんの呼びかけに応えた方々が設立発起人になりました。若月先生は一楽さんの呼びかけに応じて設立発起人になり、第1期の幹事になりました。若月先生は、それ以来、有機農業のオルガナイザーとして活躍されました。

1994年12月号の日本有機農業研究会の機関誌『土と健康』に、若月先生の、かなり長い有機農業に関するインタビュー記事が載っております。

そこで、最後にインタビュアーから「先生、有機農業というものをどういうふうにお考えですか」と質問をされています。

若月先生はそこでまず農薬問題の重要性について強調されています。「農薬という人工的なものを使うということは、一般的には生産性向上になるかもしれないが、しかしこれは反自然的な方法ですから、危険が伴うということ。したがって『農薬である』ということと対処しなければならぬから、むやみに使ってはならない」。農薬の使い過ぎについて、大変心配されておられて、有機農業の発展に、農薬問題解決の夢をおかれたということですね。

次に、若月先生は「農業は自然との結びつきで行われる仕事であるから、自然、環境、土壌といったもの、つまり自然生態系を守っていくことが何より大切なこと」と述べておられます。有機農業は、資材投入に依存するのではなくて、自然の生態系を豊かにすることによって農業がうまく回っていくということ、有機農業は特殊な農業のあり方ではなくて、人類の長い農業の歴史のなかで、ずっと続けてこられてきた基本的なあり方なんだと先ほどお話ししましたが、若月先生もそのことを強調されて、だから有機農業においては自然生態系を守るということがとても大事だということをおっしゃっておられます。

若月先生は併せて「同時に地域、郷土、健康を守っていくこと。しかも全体を一つのもののようにして」とも述べておられます。だから健康の話は健康の話、農業の問題は農業の問題、地域の産業は地域の産業として考えるのではなくて、地域が一体として、全体のものとして考えなくてはいけない。そして、「私は農村医学をやっていますが、この地域性が非常に大切に思えるんですね」というふうにおっしゃっておられる。

有機農業は、グローバルでコスモポリタンの農業ではなくて、やっぱり佐久の有機農業は佐久の有機農業なんだよ、佐久の有機農業は佐久の地域と一体の有機農業であって、佐久における食べ物の産業とも、佐久における健康を守る取り組みとも、佐久における教育の取り組みとも、みんな一つの動きとして、一つの取り組みとして進んでいかなければならない、というのが若月先生のお考えでした。

佐久市のように、地域有機農業推進協議会のようなものとして、広がっていくことが大事だということでしょう。こういう動きが出てきたのは、最初に申し上げましたが、日本全国で見ると、2006年の有機農業推進法以降の話なんですけれども、若月先生は、15年前すでにこうおっしゃっています。

おそらくこのお話は、臼田町有機農業研究協議会のご自身の実践を踏まえてのお話だったのではないかな、というふうに思います。

若月先生はもう一つ。「私は有機農業を基本的には自然農法的な方法を参考に、多少他の技術を組み合わせることと考えています」とも述べておられます。

これは、自然農法的な考え方というだけで必ずしも現実的に種が育たなかったりするんですが、そこにはいろいろな工夫がありますよと、そのいろいろな工夫も大事にしながら、しかし、考え方として、農業は自然とともに歩むんだという考え方で進むことが必要なんだ、ということもお話しされています。

このあたりについては若月先生いろいろおっしゃっていて面白い。「しかし、必ずしも自然農法でなければいけないということに賛成しているわけではありません」。やっぱり現実を見ますね、なかなかそう簡単には割り切れないよ、ということも若月先生も良くご存じだと。

「というのは、農業もアグリビジネスとして、いろいろのことと連携し、産業として発展していったいいわけですから」とも述べておられます。若月先生が今もご存命だったら、いまの TPP 反対を表明されたと思いますが、しかし、同時に先生は経済や産業を否定はされなかった。

若月先生は、まあ世の中なかなかそう簡単に割り切るわけにもいかない、という現実認識をされながら、同時に理想を現実の取り組みとして追求されてきました。今、私たちは先生のこうした見地に学び、これからどう歩むのかということ、真剣に考えていかなければならないのだと思います。

### **有機農業は身土不二を目指す**

プログラムを見ますと、このあと松島先生が地産地消、身土不二のお話をさせていただけることになっているので、私が申し上げることもないんですけど、有機農業の考え方の根本は何ですか、と問われると、それはおそらく身土不二という考え方になると思います。

身土不二というのは、身体と土を二つに分けることはできないと、人の身体は人が生きる土地の風土と切り離すことは出来ないという考え方で、この考え方は中国の仏典、仏教のお経のなかに書かれている言葉だと伝えられています。私もその仏典を直に見たわけではありませんが、大変意味深い言葉だと思います。

韓国ではこの身土不二が大変人気のある言葉で、韓国の農協は、農協の存立のスローガンとして身土不二を掲げています。身土不二、日本では何だその仏法臭いことをと言われますけれども、韓国に行くと大変いい言葉として使われているようです。有機農業が昔から身土不二を大切にしています。

食べ物で健康を作り上げていくという考え方に、貝原益軒以来の食養生の考え方があります。そこでは一物全体食、いのちをいただくとか、あるいは一里四方、これは四里四方という方もいらっしやいますけれども、とにかく近在のものを、近在で生産されたものを食べて生きる、地産地消というところに、人間の暮らしの根本があるんだと。

今のグローバル化の時代からすると、正反対の考え方だと思いますけれども、冷静に人の生き方ということ考えた場合、こういうことを改めてしっかり考えることが今必要なんではないか、そのことが、皆さんのなかに、もし具体的な豊かなあり方として伝えるこ

とができれば、有機農業は、もしかしたら世界を救うかも知れない。という気がいたします。

有機農業は地域・暮らしを変え、時代を拓く

佐久市のなかにある有機農業は、まだ 10 ha ぐらいの土地だというふうに伺いましたが、まだ小さい取り組みですけれども、志は大きいですね。これからいろいろな取り組みと連携をしながら、ぜひ佐久市の農業全体が変わっていくという計画、プログラムも考えていただきたい。

佐久市で農業が変われば、すなわち地域が変わるだろうということだと思います。皆さんが元気に耕すようになってくる。耕すためにいろいろな人たちが佐久市に集まってくる。そういう状況になれば、おそらく必ず地域は変わるだろう。有機農業は暮らしを変えて、そして有機農業は人生変えていく。人生がねじ曲がっておかしな方向に行くのはまずいですが、皆さんが幸せに生きていくという人生がつくられていく。

そして有機農業は、TPP のように、日本に中国のものが入ってきて、日本のものが中国に売られていくという形ではなくて、それぞれの国や地域が、それぞれ自立的に協力し合って生きていけるような世界をつくっていく。

有機農業は時代を拓く。いま 21 世紀の 10 年が終わったわけですが、要するに 21 世紀のこの 10 年は、20 世紀の 100 年を越えて、次の 100 年をどうつくるのか、という模索の 10 年だったと思いますね。そこで、TPP のような乱暴な政策展望が突きつけられているわけです。日本はこれからどちらの方向に進むんでしょうか。

私たちは自然とともに食と健康の道を進みたい。そういう時代を 21 世紀として拓いていく。その取り組みの中に有機農業も小さな試みではありますけれども、役割を果たしていければというふうに思います。

時間になりました。ご清聴ありがとうございました。

